



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	歴史学における儀礼研究の今日的位相：デイヴィッド・キャナダインの研究を中心に
Author(s)	平澤, 里央
Citation	西洋史論集, 1, 77-84
Issue Date	1998-07-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/37414
Type	departmental bulletin paper
File Information	1_77-84.pdf



平澤里央

現在、歴史学には文化人類学や社会学が大きな影響を与えている。

政治文化論の特色が顕著に現れるのは、象徴や儀礼に関する研究であらう。デイヴィッド・キャナダインは『王室儀礼』の「序説…王た

けれども現在、この文化人類学的なアプローチに批判が寄せられていることも確かである。もちろん歴史の研究に他の学問領域の影響が現れることもそのものが問題となっているのではない。それはテクスト中心主義的な文化人類学への批判であるとともに、隣接諸科学の理論を無批判に歴史研究に応用することを問題視するものである。そこでここでは、歴史的な儀礼研究のありかたというものを、デイヴィッド・キャナダインの儀礼に関する研究に則して考えてゆきたいと思う。最初に、先に挙げた『王室儀礼』のなかのキャナダインによる「序説…王たちの神聖儀礼」を参考にして、文化人類学や社会学における儀礼研究の目的や方法とはいかなるものなのか、そして文化人類学や社会学の理論を歴史の研究に用いる場合の問題点とは何なのかということを明らかにしていきたい。さらに「ダイヤモンド・ジュビリー」(II ヴィクトリア女王の即位六〇周年記念式典)に関してキャナダインとエリザベス・ハマートンが共同執筆した論文「儀礼をめぐる対立と合意…ケンブリッジにおける一八九七年のダイヤモンド・ジュビリー」⁽⁴⁾(以下では「ケンブリッジにおけるダイヤモンド・ジュビリー」)を

取り上げ、彼らがどのように研究を進めて上記の問題を克服し、隣接諸科学（ここでは文化人類学・社会学）のアプローチと歴史研究の接合を図っているのかを見てゆきたいと思う。

一 儀礼研究における文化人類学・社会学の影響

デイヴィッド・カナダインとサイモン・ブライス編集の『王室儀礼』は、五人の歴史家と三人の文化人類学者による計八本の論文から構成されている。ここに集められた論文は、バビロン、ローマ帝国、ビザンティン帝国、カロリング王朝、八世紀の唐王朝、一八世紀のネパール、一九世紀のマダガスカル、そして近代のガーナという多種多様な時代・社会を対象として、権力と儀礼の関係を探っている。

権力と儀礼の結びつきは王室の儀礼にのみ現れるわけではない。ナチスドイツやフランス革命などの研究が示すように、民主主義や共和主義、寡頭政治、独裁政権などあらゆる政体の権力が、君主制と同じように深く儀礼と結びついているであろう。けれどもカナダインはそのなかでも王室の儀礼を重視している。なぜなら、もはや王権神授説が支配的ではない今日ですら、王たちの神聖な儀礼は民衆を魅了し続け、そしてその解釈と分析を必要とし続けているからである。新聞の風刺漫画には、礼服で装い、玉座に座り、頭上に王冠を戴いた君主の姿が描かれ、またイギリスの皇太子チャールズとダイアナの結婚式や最近のダイアナの葬儀は世界中の人々の関心をよんだ。現在ですら王室儀礼がこれほど注目を集めるのならば、過去においては王室と儀

礼はどれほど深い関係を持っていたのか。カナダインの関心はこのようにして王室の儀礼へと向けられる。

『王室儀礼』に寄稿しているのは歴史学や文化人類学を専門としている研究者たちなのだが、カナダインは「序説…王たちの神聖儀礼」で、文化人類学だけではなく社会学もとりあげ、歴史学における儀礼研究への双方からの影響を検討している。

カナダインが述べているように、これまでも多くの歴史学や隣接諸科学が広い意味での政治的行為という概念を研究対象としてきた。多くの社会学者にとって、政治とは権力の行為と被支配者のその行為への反応に限られるのではない。社会学では、支配と服従のヒエラルキーが創りだされ、維持され、そして覆される多様な手段として政治を扱っている。社会学者のなかには、支配する側のエリートたちがどのようにして対抗文化を社会から閉め出し、逆に自分たちによる社会統制を正当化するかということに関心を持つ者もいる。このような者たちにとって、権力と儀礼の関係が重要な関心領域となってくる。

それでは文化人類学者にとって、儀礼研究とはどのような意味を持つのであろうか。文化人類学者にとって政治とは人間活動一般を広く取り巻くものであり、政治理論に関するテキスト、政治家たちの書簡集や内部抗争、政府刊行物、もしくは議会での討論だけに制限されるものではない。政治とは政治的な活動や政治的なレトリックといったことも含んでいるものとされる。つまり、建造物、絵画、旗のような人工物、王を神聖な存在として考えるような信念、祝祭やカーニヴァル、式典のような祭典のことである。文化人類学者たちには、支配者

たちの儀礼とはあらゆる社会の構造と働きの中心をなすものなのだとキャナダインは強調している。

『王室儀礼』では、歴史家と文化人類学者という異なる研究分野を専門とする人たちによる、同一主題への多様なアプローチの仕方が示されている。キャナダインはここに集められた論文を通して、歴史学と文化人類学の儀礼研究の相違を比較する。歴史家たちは儀礼が発展し、変化し、そして衰退する道のりを数世紀に及ぶ長い時間で考察し、儀礼と従来政治や社会の構造として理解されてきたものとを注意深く結びつけようとする。他方で、文化人類学者たちの研究では百年を越えた考察を行っているものはない。文化人類学では儀礼を変化しないものとしてとらえる傾向があり、権力の構造はあまり重視されない。文化人類学者は儀礼が何を意味し、何をなし遂げたのかということの方に大きな関心を持っている。過度の単純化かもしれないが、儀礼研究において、歴史家は社会に対する儀礼の機能に関心を持ち、文化人類学者は儀礼というテキストに反映された社会を考察しているのである。

これらの違いは過度に強調されるべきではないが、歴史学とは異なる視点を持つ社会学・文化人類学の理論やそれらから提起された問題を考慮することは、広義の政治史という観念を考えるうえで歴史家たちに有益であった。けれども社会学や文化人類学の理論を用いたアプローチの仕方に問題が無いわけではない。

デイヴィッド・キャナダインも文化人類学や社会学の理論が歴史研究に大きく貢献したことを認めつつ、それらの学問領域のアプローチ

が歴史学における儀礼研究に応用されるときに持つ問題点を指摘している。彼が問題とするのはまず、これらのアプローチが完全に静止した社会を背景として、儀礼を全く変化しないものとしてとらえてしまうような危険性を持っていることである。またこのようなアプローチの仕方が時として行い、儀礼の過度の分析や読み込み過ぎも彼は問題視している。コンテキストを過度に充実させて、叙述を「厚く」し過ぎると、研究の目的であった儀礼自体はおびただしい細部の描写のなかで埋没してしまうことがある。そうなれば逆に、多くのことを叙述しているにもかかわらず、その研究は実質的には社会全体の浅薄な説明にしかならないだろう。儀礼自体のシンボリズムに心を奪われて、社会的コンテキストや歴史的視野を忘れてしまうような研究も問題である。キャナダインは儀礼の行き過ぎた解釈は儀礼の主観的な意味を見いだそうとするものであり、そのような研究は歴史家たちの学術的論争に値するものというよりも文学的なものになってしまいうだろうと批判を寄せている。

しかしながら、さまざまな問題を抱えているとしても、文化人類学や社会学から歴史学に与えられた影響は重要である。特に儀礼研究においてはこれらの学問分野から多くの理論とアイデアが引き出されてきた。それならば、歴史的な背景を忘れることなく、文化人類学や社会学の理論を用いた研究を行うにはどのようにしたらよいのかという問題がでてくるであろう。キャナダイン自身は自らの提示した社会学的・文化人類学的アプローチの問題点をどのようにして克服しているのであるか。そこで次に、キャナダインとエリザベス・ハマートン

の論文「ケンブリッジにおけるダイヤモンド・ジュビリー」で、彼らがダイヤモンド・ジュビリーという儀礼をどのように研究しているのかを見ながら、上記の点を考えてゆきたいと思う。

二 問題の克服——ローカル・スタディーの可能性——

ダイヤモンド・ジュビリーとは一八九七年のヴィクトリア女王の即位六〇周年記念式典のことで、六月二日を中心としてその前後に行われた一連の儀礼を指している。女王自らが参加したロンドンでの祝典の他にも、大英帝国各地でお祝いの式典や行進などの行事が催されていた。また一〇年前の一八八七年にはゴールデン・ジュビリーと呼ばれる即位五〇周年記念式典が開催されている。デイヴィッド・キャナダインとエリザベス・ハマートンが共同執筆した論文「儀礼をめぐる対立と合意……ケンブリッジにおける一八九七年のダイヤモンド・ジュビリー」は、多くの祝祭のなかでもケンブリッジで祝われたダイヤモンド・ジュビリーについて考察したものである。

この論文の主題は、あるコミュニティのダイヤモンド・ジュビリーの計画、そして祝祭の過程を調べることで、地域社会内部の絆や連帯と同様、緊張や軋轢といったものがどのように儀礼に反映されるのかを理解することだとされている。「ケンブリッジにおけるダイヤモンド・ジュビリー」では、五つの局面から問題を検討していくのだが、その五つの局面も、ケンブリッジの社会構造、儀礼の準備、儀礼そのものといった考察に分類できる。ここでは儀礼自体だけを解釈するの

ではなく、歴史的な背景やコンテキストを考慮することで、解釈人類学がしばしば持つテキスト中心主義という問題点を克服しようとしている。

キャナダインとハマートンが分類する五つの局面のうち、第一はケンブリッジ内部の緊張と軋轢という面である。彼らはケンブリッジには空間的、社会的、経済的背景において敵対するふたつの社会的結合関係が存在したことを検証している。この社会内部の分裂には大学の存在が大きく関与していた。当時大学は学生数の増加などによって一七世紀後半以降で最大の拡大を経験していた。しかし学生数の増加に伴う入学金の増加にもかかわらず、農業不況で大学の所有する土地の農業用地からの収入が激減し、そこに自然科学分野の拡張が重なったため、ダイヤモンド・ジュビリーの年には、大学の財政は最悪の状態だった。一八八二年の大学改革では、大学の研究員の結婚を禁じる制約が取り除かれたために、彼らのなかで結婚ブームが生じて「知的貴族階級」と呼ばれる階層が形成された。彼らの生活は中流階級に属するものであったが、たとえ知的貴族階級より裕福であっても、大学に関係を持たない市民は知識人社会には受け入れられなかった。彼らのために特定の地域に中流階級住宅が数多く建設されたことによって、一九世紀後半のケンブリッジでは空間的な分離が進められ、ふたつの中流階級のグループが存在するようになった。以上のような背景に加え、大学が依然としていくつかの特権を享受していたことも市民と大学側の溝を深めていた。さらに市民は一般にリベラルで非国教徒であり、他方、大学側には国教徒が多く、大学と市民の対立は英国国教会

と非国教徒との宗教的対立という意味も持った。

一九世紀のケンブリッジにはこのような緊張と軋轢が存在していた。大学はケンブリッジを空間的、宗教的、経済的、政治的にふたつに分けることになったのであるが、と同時に別の方法でケンブリッジを一体化していたのも大学であった。キャナダインとハマーントンは、次にコミュニティどうしをつなぐ絆について考察している。

当初、ケンブリッジの労働者階級の大半はその生計を大学に依存していた。大学への経済的依存は、基本的に保守的な労働者階級を創りだしていた。中流階級の強力なパトロネジのなかで形成されていたケンブリッジの労働者階級独自の文化は、「自助」(self-help)や「品行方正」(respectability)、「進歩」(improvement)といった意識に現れ、その精神は「ケンブリッジ友愛組合」(the Friendly Societies)や他の諸団体に表現された。「慈善組織協会」(the Charity Organisation Society, the C.O.S.)に精力的に参加した者のなかには、大学側のコミュニティに属する女性たちが多く見られた。このような労働者階級の自助と中流階級の博愛のイデオロギーには明らかにいくつかの類似点が見受けられ、大学側と市民を近づけるのに役立っていた。大学が拡張するに伴って市民が繁栄したこと、ジョン・パットソン(Sir John Patteson)とどう仲裁役が現れたこと、また徐々に大学の法の特権が取り去られたこともあって、市民と大学は衝突よりも協調の道を歩みはじめた。ケンブリッジにおけるジュビリーの責任者となったホレス・ダーウィン(Horace Darwin)は家系や経歴など多くの意味で典型的な大学人であったが、市民とのつな

がりも強いという二面的な人物であった。しかし、市民と大学との融和が見られたのは社会的なレベルよりも法的なレベルであり、ダーウィンの仕事が簡単に進んだわけではなく、ジュビリー開催のための障害が無くなったのもなかった。

第三の局面は、ダイヤモンド・ジュビリーの催しを企画する段階である。三月一五日、ダーウィンは公式な会議を開いてジュビリーの儀式自体の計画を立て、またジュビリーの記念企画を考えるために委員会を設置した。この会議を構成した五五人のほとんどは中流階級もしくは小ブルジョワであり、大学側や労働者階級が十分に代表されているとは言えなかった。ダーウィンは二重の目的を持ってこの会議に臨んでいた。まず彼は市民のジュビリーが大学との協力によって開催されることを望んだ。そのため委員会の方には会議よりも大学の者を多く指名した。他方で、ダーウィンはジュビリーは市民側の中流階級のエリートたちによって主導されねばならないと考えていた。中流階級中心に構成された委員会の性格を反映して、ジュビリーは中流階級の博愛主義と市民としてのプライドの表現の場となった。すでに女王と皇太子は、ジュビリーを負しい国民の状況を改善するものにするという「一八九七年のジュビリー式典の福祉事業的見解」を全国的に打ちだしていた。そのためケンブリッジでも、病院か「地区看護協会」(the District Nurses Institution)もしくは教育施設という候補のなかからひとつが選ばれ、ジュビリー開催のために工面される資金の一部が寄贈されることになったのだが、その対象に大学は入っておらず、最終的には「看護団体」(the Nursing Institution)への寄付

が決定された。しかし、今度は実際に集められた金額が予想をはるかに下回るといふ問題が生じた。これには大学の各カレッジからの寄付が少なかったことが大きく影響していた。委員会の寄付リストには大学や労働者階級ではなく、上流階級や中流階級の名が並び、市民と大学の団結というダーウィンの思惑は外れたのだった。

第四の局面はダイヤモンド・ジュビリーそのものの計画段階である。ここでも合意と対立、そして合意というパターンが繰り返された。

ジュビリーの祝祭を企画するために設置された祝典委員会は、六月二二日の「ジュビリー・デー」の仮のプログラムを作り、その個々の計画を九つの小委員会に引き継いだのだが、どの委員会にも大学関係者の姿は無かった。資金集めに失敗した委員会は、労働者階級への影響力を考えて、友愛組合やアスレチック・クラブの指導者たちに委員会に出席し、ジュビリー成功のために協力するよう求めたけれども、逆に当初無視されたかたちになっていた友愛組合の方がその招待に反感を見せた。その後の説得によって友愛組合のメンバーは態度を軟化させ、彼らを交えた予備会議は比較的平穏無事に進んだのだが、翌日の公式会議で行進の仕方について友愛組合と委員会のあいだに衝突が起こった。飾り立てた馬車と貧しい者を対置するような行進の仕方に友愛組合の代表者たちは気分を害し、六月一日のミーティングでも友愛組合は態度を変えなかった。委員のひとりであるヒル(A.R.Hill)は労働者階級の行進を蘇らせようとし、最終的には友愛組合による公式の行進ではなく、代わりに労働者から成るサイクリング・クラブの行進が行われることになった。こうして公式の儀礼への労働者階級の

参加が実現した。また子供たちと老人のために特別な催しが行われることも決定された。

ダイヤモンド・ジュビリーの儀礼自体が、この論文の五番目の局面として設定される。ジュビリーは六月一七日、大学での多くの植民地政治家への名誉学位の授与式から始まった。こうして大学は玉座と帝国に敬意を表したのだった。二〇日の日曜日には、教区教会であると同時に大学の教会でもあるグレート・セント・メリー教会で特別な礼拝が挙げられ、今度は市民が玉座と帝国の前にひざまずいた。女王の健康が祝福され、国歌と新しいジュビリー讃歌「おお 王者の王」(O King of Kings)が歌われ、説教では女王への忠誠心が強調された。国教会・非国教会を問わず、街の教会すべてで同様の忠誠心が表現された。その日には他の催しも行われたが、それは宗教的なものから世俗的な祝祭へと変わっていった。二一日にはサイクリング・クラブのパレードやコンサートが催された。二二日のジュビリー本番の儀礼は滞りなく進んだ。正午、六〇丁の祝砲と千羽の鳩が放たれ、会費制昼食会、スポーツと見せ物、馬車による行進、ウォーター・カーニバル、コンサートとそれに続く花火が催され、ほとんどが盛況に終わった。木曜の午後には六〇才以上の住人のための巨大公式晩餐会が大型テントで開かれ、次の日の午後には七才から一二才の児童たちが五千人ほどお茶に招かれた。こうして一連の催しは成功に終わり、新聞はジュビリーがその開催以前にあった対立を融和させていったことを語った。

キャナダインとハマーントンによる、ケンブリッジにおけるダイヤモ

ンド・ジュビリーの検討を構成しているのは、以上の五つの局面である。ここではジュビリーのような儀礼とは、社会が結束している状態を反映して行われるのか、それとも社会内部の対立を解決するための機能なのかという「不毛な」議論を行っているのではない。この論文で問題としているのは、なぜケンブリッジのダイヤモンド・ジュビリーは上述の形態をとったのかということである。カナダインとハマー-tonは、五つの局面からのジュビリーの具体的な分析によって、社会における儀礼の位置を探ろうとしたのである。

すでに紹介したように、カナダインは先に挙げた『王室儀礼』の序説のなかで、歴史家と文化人類学者の儀礼研究における関心の違いは、「歴史家は社会における儀礼の作用に関心を持ち、文化人類学者はある儀礼を通して社会の働きを考察」することだとしている。「ケンブリッジにおけるダイヤモンド・ジュビリー」は、その双方の面を備えていると言えるだろう。カナダインとハマー-tonは、ケンブリッジでのダイヤモンド・ジュビリーの祝祭を通して儀礼の持つ機能を検討しているのであり、同時に儀礼を通してケンブリッジという固有の社会の考察を行っているのもある。

このように、ローカルな社会的結合関係を、政治文化との関連で分析した研究は少なくない。実際、ローカル・スタディーは政治文化というものを考えるときにはさらに有効な方法だと思われる。例えば儀礼研究で考えてみた場合、いままで見てきたように、社会的な背景なしで儀礼の意味を理解することはできないし、儀礼を考察することはある社会を理解することでもある。カナダインは社会によって儀礼

や政治的経験に相違点があるのだから、権力と儀礼の関係についても容易に普遍化してしまわぬよう注意するべきだとしている。つまり、ある儀礼を理解するためにはその背景となる社会の分析が重要になり、ローカル・スタディーはこの分析の深化を図るのに有効な手段となるのである。「ケンブリッジにおけるダイヤモンド・ジュビリー」というローカル・スタディーでは、歴史的背景やコンテクストを考慮に入れて「安易な普遍化」を避け、ケンブリッジという固有の社会やダイヤモンド・ジュビリーという儀礼を理解しようとしている。

また儀礼研究は、ナショナルなレベルで創りだされるイデオロギーと、ローカルなレベルでの社会的結合との相互作用を考察するためのひとつのアプローチとして考えられる。「ケンブリッジにおけるダイヤモンド・ジュビリー」でも見てきたように、政治文化論的なローカル・スタディーでは、ネーション・レベルのイデオロギーが普及・伝播していく状況だけではなく、そのイデオロギーがローカルなレベルで受容され、解釈し直される過程をも包括的に描くことができる。隣接諸科学の理論を用いたローカルな歴史分析を政治文化論的に行うことは、権力や社会の考察における安易な普遍化を避けながら、ネーション・レベルでの歴史の複雑な全体像を把握することにつながるのである。

おわりに

以上、歴史的な儀礼研究のありかたというものをデイヴィッド・キャ

ナダインの儀礼に関する研究に則して見てきた。本稿一では『王室儀礼』のなかのキャナダインによる「序説…王たちの神聖儀礼」を参考に、文化人類学や社会学における儀礼研究の目的や方法とはいかなるものなのか、そして文化人類学や社会学の理論を歴史の研究に用いる場合の問題点とは何なのかということを考え、本稿二ではキャナダインとエリザベス・ハマートンが共同執筆した論文「儀礼をめぐる対立と合意…ケンブリッジにおける一八九七年のダイヤモンド・ジュビリー」を取り上げて、問題を克服する方法と、隣接諸科学と歴史研究の接合の可能性のひとつをローカル・スタディーのなかに探ってみた。

ここで見てきたように、文化人類学や社会学のアプローチの歴史的な研究における問題点として、社会を静止したものとしたり、儀礼を変化しないものとしてとらえてしまうこと、儀礼の過度の分析や解釈、社会的コンテキストや歴史的視野を忘れてしまうことなどが挙げられる。その問題を克服するならば、さまざまな学問領域の理論やアプローチ、アイデアといったものから影響を受け、刺激されるのは好ましいことである。逆に包括的な歴史研究というものを考えるならば、他の分野の影響やその応用が見られてしかるべきであろう。ここでは隣接諸科学として文化人類学と社会学を想定してきたのであるが、歴史研究に影響を及ぼす分野がそれだけに限定されるわけではない。リン・ハントが言うように「歴史家は研究を進める上で、社会学と人類学、あるいは人類学と文学理論のどちらかを選ぶ必要はない」のである。ある社会へのアプローチの仕方として歴史学や文化人類学・社会学

を用いるのだと考えたら、これらの学問分野が相互に結びつくことに不思議はない。けれどもその融合は、それぞれの学問分野の背景を無くしてしまうことではない。歴史研究においては、歴史的背景を無くすことなく、隣接諸科学の理論を用いるためにも、政治文化論におけるローカル・スタディーの可能性を考えてみるができるであろう。

註

- (1) 竹岡敦温・川北総編、『社会史への道』有斐閣選書、一九九五年。
- (2) David Cannadine, 'Introduction: divine rites of kings', in David Cannadine and Simon Price (ed.), *Rituals of Royalty: Power and Ceremonial in Traditional Societies*, Cambridge, 1987.
- (3) Lynn Hunt (ed.), *The New Cultural History*, Berkeley, 1989. 筒井清忠訳『文化の新しい歴史学』岩波書店、一九九三年。
- (4) Elizabeth Hamerton and David Cannadine, 'Conflict and Consensus on a Ceremonial Occasion: the Diamond Jubilee in Cambridge in 1897', *Historical Journal*, vol. 24, no. 1, 1981.